

## 審査の結果の要旨 氏名 大塚 紀弘

本論文は、歴大な研究蓄積のある鎌倉時代の仏教改革運動について、新旧仏教の対抗という従来の構図と、それを批判して出現した顕密仏教論の、双方を批判の対象として、教理から寺院生活に至る幅広い観点から考察を加え、研究史を塗り替える問題提起を行ったものである。そこには、論文の表題に示されるように、僧侶の日常生活における人間結合の再構築という視点が貫かれている。

まず序章では、黒田俊雄氏によって提起され、中世仏教史研究のパラダイムを構成している「顕密体制論」に対して、正面から批判を試み、それを通じて本論文の視角と構成を導き出した。

第一部「顕密仏教と禅律仏教—宗派・三学・門跡—」では、「禅教律十宗観」という、諸宗派の分立をとらえる新たな構図のなかに「中世禅律仏教」を位置づけ、それを改革運動の担い手として積極的に位置づけた。また、教理史の観点から、仏教を構成する戒定慧の三学のうち、顕密仏教が慧を極端に重視するのに対し、禅律仏教は三学の調和的な再興をはかり、法然・日蓮は三学の修得が困難な衆生の救済を目指した、という構図を提示した。いずれも、日本史学側からの研究には欠けていた巨視的な俯瞰図であり、仏教学や思想史学側からの研究との対話に道を開いたものと評価できる。

第二部「律家の成立史—律法興行と持斎・都市—」および第三部「三鈷寺流の成立史—教院興行と南宋教院—」では、従来位置づけがあいまいだった律宗および浄土宗三鈷寺流の改革運動について、南宋仏教教団の組織原理を積極的に導入して、寺院内の生活規範の立て直しを軸に、仏教本来の実践性を取り戻そうとする運動、という評価を与えた。とくに、①午後には食事を摂らない「持斎」という戒律を典型例として、衣食改革のもった大きな意義を仏教改革運動のなかに位置づけた点、②13～14世紀の日中仏教界の交流を通じて、南宋の律院・教院の組織形態や諸規律が導入され、古代寺院とは異なる堂舎配置や僧侶生活の定着をもたらしたことを明らかにした点、の2つは、大きな成果である。

ただし、論文の構成面においてはやや難がある。第一部第三章「曼殊院門跡の成立と相承」は、個別研究としては意義あるものだが、部の題が予想させるような、宗派・三学と並び立つレベルでの「門跡論」として、著者の顕密仏教論を展開したものとはなっていない。また、第三部第七章「鎌倉前期の入宋僧と南宋教院」は、第二部・第三部全体の前提となる内容で、置き場所に難点がある。

以上、本論文は、若干の不十分な点があるとはいえ、当該分野の研究に大きな反響を呼ぶであろうことは疑いない野心的・独創的な内容であり、本委員会は、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。